

カフカ作品における対話の「歪み」：Von den Gleichnissen のテキスト言語学的分析

著者	西嶋 義憲
雑誌名	ドイツ文学論集
巻	33
ページ	5-14
発行年	2000-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/16787

カフカ作品における対話の「歪み」*
—— *Von den Gleichnissen* のテキスト言語学的分析 ——

西 嶋 義 憲

カフカ作品における対話の「歪み」* —— Von den Gleichnissen のテキスト言語学的分析 ——

西 嶋 義 憲

0. はじめに

カフカ作品における対話(会話)の中には、言語相互行為として形式的に滑らかに進行しているように見えるが、意味論的に必ずしも整合的な事態が提示されているとは言えないものがある。本稿では、そのような「歪み」をもつ対話の基本的な構造を、カフカのテキスト *Von den Gleichnissen* の対話部分の分析によって明らかにしたい。

1. カフカ作品の対話の特徴

1.1. 先行研究の問題点

文学研究および言語学研究において、カフカ作品を対象に、その作品内で行なわれる対話の構造を分析している研究はほとんどない。Hess-Lüttich (1979) は、その数少ない研究例の一つである。本節では、議論の出発点としてこの論文を取りあげる。

Hess-Lüttich (1979) は、カフカ作品の対話に見られる、誤解による相互行為 (Interaktion) の破綻をカフカ作品の特徴と見なし、言語学的な観点からその説明を試みている。その試みによれば、誤解とは、対話参与者間の対象規定の食い違いによって引き起こされる、命題理解の不一致と定義される。そのような誤解が生じると、意味論的な結束性 (semantische Kohärenz) が破られ、唐突にテーマが変わる。それによって対話の流れに溝が生じる。ところで、先行する発話と関連のある発話を行なうのは、いわゆる協調の原則にのっとりた行動である。したがって、意味論的なレベルで食い違いが引き起こされると、それは、対話参与者による相互行為としては非協調的と見なされる。「カフカの特徴 (Das Kafkaeske)」は本質的に、誤解を招くことによる相互行為の失敗に基づいているという (Hess-Lüttich: 1979: 365)。

この議論で引き合いに出されているのは、Grice(1975)で提出された協調の原則 (cooperative principle) である。一般に話し手と聞き手は会話が成立するよう協力するが、Grice はそれを協調の原則という一般原則にまとめ、その下位規則としてつぎの四つの会話の公理 (maxims of conversation) を区別した: 1) 量の公理

(maxim of quantity); 2) 質の公理 (maxim of quality); 3) 関連性の公理 (maxim of relation); 4) 様態の公理 (maxim of manner)。この原則は、もともと会話の含意 (conversational implicature) と呼ばれる言外の意味を説明するために考案されたものだ。たとえば、字義どおりに理解すると公理のいずれかに抵触し、非協調的と見なされうる発話が、おおもとの一般原則に従っていると期待できる限り、その発話には別の意味 (含意) があると予測できる。その場合、ただちに推論が行なわれ、それによって適切な言外の意味が導き出されることになる。この原則は、会話というものは常に何らかの情報を効率的に提供するという前提に基づいて設定されたものだ。この前提に立てば、たしかに意味論レベルの食い違いによって相互行為が非協調的であると見なされるのは、情報の効率的な伝達という目的に関わる協調の原則に対する違反として説明できるかもしれない。しかし、たとえ対話がその意味で非協調的であるにせよ、対話という相互行為それ自体が形式的に成立していないわけではない。このような相互行為の形式的成立を、Grice 流の協調概念で適切に説明することはできない。さらに付け加えるなら、作品内の対話の中には、必ずしも登場人物間の情報伝達を目的としているとは言えないものもある。言葉遊びはその一つの例である (カフカの言葉遊びについては、Politzer (1983) を参照)。とするなら、言語相互行為としての対話のやり取りでは、別の種類の協調も同時に働いていると考えざるをえない。

1.2. 対話と形式的協調

Ehlich (1987) によれば、言語行動における協調の形態には三種が区別できるといふ。すなわち、1) „materielle Kooperation (協働的協調)“, 2) „materiale Kooperation (道具的協調)“, それに 3) „formale Kooperation (形式的協調)“ である。1) は、労働の生産過程で見られる協調であり、2) は、労働という目的に限定されず、協調それ自体の外側にある目的に関わる一般的な協力関係である。3) は、相互行為それ自体を成立させる参与者による相互作用形式である (相互行為と協調に関しては、丸井 (1992) が詳しい。訳語の一部は、上記文献から借用)。Hess-Lüttich (1979) が引き合いに出している Grice (1975) の協調概念は、この三分類と関連づけると、2) の道具的協調形式にあたる。対話という相互行為それ自体の外側にある目的 (たとえば情報の効率的な伝達) によって規定されているからである。

Hess-Lüttich (1979) が主張しているように、たしかに、意味論レベルの食い違いによって相互行為が「非協調的」と見なされるのは、情報の効率的な伝達という目的に関わる協調の原則、すなわち道具的協調形態に違反しているからであろう。その意味で、カフカ作品の対話の特徴を協調の原則違反による相互行為の失敗と規定できるだろう。しかし、その際、対話という相互行為それ自体が形式的に、その意味では協調的に成立していないと、この議論は成り立たない。ここで関連してくるのが 3) の形式的協調である。すなわち、カフカ作品の対話は、たしかに道具的協

調という意味では「非協調的」と見なされるが、形式的協調に関しては「協調的」でなければならない、この点で対話は形式的にまとまりをもつ。したがって、カフカ作品のある種の対話は、意味論レベルで齟齬を来たしてはいるが、相互行為レベルでは形式的協調行為がなされ、その意味で結束性が高い可能性がある。

1.3. カフカ作品の対話における結束性

テキスト内の対話構造を分析する際、意味論レベルとそれが埋め込まれているテキスト内言語相互行為レベルの二つのレベルを区別することは有益である。その二つの区分にしたがって、テキストのまとまりを構成する結束性を、意味論レベルだけでなく、相互行為レベルにも関係づけることができるからだ。結束性とは、実際は程度の問題である。しかし、極端な場合として、二つのレベルそれぞれについて結束性の高低を想定することができる。すると、論理的にはつぎの四とおりの組み合わせがありうる：a) 意味上の結束性が高い — 相互行為上の結束性が高い、b) 意味上の結束性が高い — 相互行為上の結束性が低い、c) 意味上の結束性が低い — 相互行為上の結束性が高い、d) 意味上の結束性が低い — 相互行為上の結束性が低い。たしかに論理的にはこの四つのパターンが考えられるが、そもそも相互行為レベルで言語表現を媒介とした形式的な結束性がきわめて低いと、対話という相互行為は基本的に成立しえないので、b) と d) のパターンは理論上はありえても、現実的には存在しないだろう。すると、事実上ありうる対話は、残りの二とおりのパタンのいずれかに属することになる。通常期待される対話は、a) のパターンであり、変則的なのが、c) のパターンである。

c) は、意味論レベルでは十分な結束性が欠如しているが、相互行為レベルで形式的な結束性が認められるという対話形態である。このような二つのレベル間の結束性の不統一という特徴は、カフカ作品に描かれる対話にしばしば見出される。カフカ作品の対話は多くの場合、意味論レベルにおいて一つの事態について相反する叙述がなされるため、その対立によって一見対話全体に結束性がないかのように見える。しかし、言語相互行為という側面から同じ対話をとらえると、形式的結束性があることがわかる。すなわち、そのような対話では意味論レベルでは結束性がきわめて低いが、対話参与者間の積極的な働きかけによる相互行為としては形式的「協調」関係が保たれているので、対話全体としてあたかも結束性があるかのように見える。

1.4. テキスト例 *Die Bäume*

そのような変則的な構造をもつテキストの分析例を紹介しよう。カフカの小品 *Die Bäume* は、対話という明示的な構造はもっていないが、対話の形式を備えている。西嶋(1990)は、この小品のテキスト構造をテキスト言語学的に分析したものである。この分析に基づいて、このテキストの構造を簡単に説明する（詳細について

は上記文献を参照のこと)。以下にテキストの全文を掲げる (引用: *Sämtliche Erzählungen*, S.19) :

Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. Scheinbar liegen sie glatt auf, und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. Nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

テキストの全体的な構成に関しては, „wir“と„Baumstämme im Schnee“の比較から始められ, 残りのテキストはすべて „Baumstämme im Schnee“をテキスト表層上のテーマとして展開される。すなわち, 第一文のテーマが第二文以降に引き継がれず, „Baumstämme im Schnee“が新たなテーマとして展開されている。意味論レベルでは, „Baumstämme im Schnee“の様態について „glatt aufliegen“と „fest mit dem Boden verbunden sein“が対立している。しかも, 両者が次々に否定され, 整合的な集約点のない構造をもっている。すなわち, 意味論レベルでは, まず, 接続法二式によって主観世界の事態が提示され, それが否定される。その際, 根拠として現実世界の事態(直説法による提示)が参照される。つぎに, その否定の根拠となっている現実世界の事態が否定される。しかし, 現実世界における事態の否定では, その根拠が提示されない。したがって, 意味論的に整合的な事態が最終的に提示されないので, 結束性の程度は低い。ところが, 言語相互行為レベルに関しては, 否定の繰り返しとその否定表現の漸次的強調によって相互行為としての結束性がきわめて高いことがわかる。意味論レベルでは, 整合的な意味世界の構築を拒否する構造をもつが, 言語相互行為のレベルでは, 結束性を高める口語的表現手段が使われ, まとまりがあるわけだ。

ところで, 言語相互行為レベルでの結束性を構成しているのは, Ehlich (1987)の定義によれば形式的協調である。Marui (1994)によると, 形式的協調を構成する要因は, 言語文化によって異なり, ドイツ語による相互行為において形式的協調を形成するのは, 相手との違いを明確にさせる対立, すなわち競合だという(vgl. Reinelt 1992)。その競合関係は, 論弁性(Argumentativität)という性格をもつ特定の言語表現の組み合わせによって実現されう。上記作品には, その論弁的性格をもった場面性の高い表現が適切に利用されている。競合的なやり取りによって形式的協調関係をたまちながら, 意味論レベルで結束性を欠如させるあるいは焦点を合わせないという特徴を, 本稿では「歪み」と定義する。このような「歪み」を含むテキストが, カフカの作品内対話に見られることがある。そのような作品内対話を対象にしてカフカ的な「歪み」を明らかにするための基礎をつくるのが, 本稿の目的である。

2. 「歪み」の構造のテキスト言語学的分析

カフカの小品の中には対話部分が質・量ともに重要な役割を果たしていると思われる作品がある。たとえば、対話部分の構成比率が高く、その対話がテキスト末に現われている作品は、当該作品における対話の重要性を示唆していると言えよう。とするなら、そのような対話を分析することにより、当該のカフカ作品全体にかかわる特徴的な構造が明らかにできると期待できる¹⁾。本稿では、紙幅の都合上 *Von den Gleichnissen* の対話部分を例に分析する。

2.1. *Von den Gleichnissen* の全体的分析

Von den Gleichnissen は、地の文と対話の二つ部分からなる。分析対象となる後半の対話部分を引用する（便宜上、番号を付す。引用は *Sämtliche Erzählungen* の359ページによる）：

- 1) Darauf sagte einer: »Warum wehrt ihr Euch? Würdet ihr den Gleichnissen folgen, dann wäret ihr selbst Gleichnisse geworden und damit schon der täglichen Mühe frei.«
- 2) Ein anderer sagte: »Ich wette, daß auch das ein Gleichnis ist.«
- 3) Der erste sagte: »Du hast gewonnen.«
- 4) Der zweite sagte: »Aber leider nur im Gleichnis.«
- 5) Der erste sagte: »Nein, in Wirklichkeit; im Gleichnis hast du verloren.«

テキストの構造を概観してみよう。1)では、「喩え話に従うなら、自身が喩え話になり、日々の苦勞から解放される」という条件帰結表現による助言がなされている。この内容を命題Pとする。2)では、この助言に対して、その命題Pさえもが *Gleichnis* (喩え話) であるという反論が行なわれる。その際、メタコミュニケーション的な口語的表現として「Ich wette」が用いられている（このメタ表現を使わなければ、「Auch das ist ein Gleichnis.」というように副文が主文化されるところだろう）。このメタ表現は、二義的にあいまいである。一つは、副文の内容に関して文字どおりに勝敗を決する「賭け」の実行を表明する。他の一つは、副文の内容に関する確信度というモダリティを表現する（より記述的に表現するなら、「Ich bin überzeugt, daß…」あるいは「Es ist ganz sicher, daß…」となる）。ところが、後続する表現が2)と反対の命題内容を表明していないので、このテキストでは文字どおりの「賭け」は期待されていないと判断される。3)では、このメタ表現の字義どおりの意味である「賭け」との関連で、「勝ち」の判断が下される。ただし、その根拠は提示されない。この決定は、単に「賭け」に勝ったことを表わすだけでなく、命題Pさえもが喩え話であるという主張が正しいことも暗示する。4)は、その「勝

ち」だという判断に対して「喩え話の中で (im Gleichnis)」という限定を行なっている。その限定は、メタ表現の字義どおりの意味での勝敗に対してだけなされているのか、それとも命題Pが喩え話であるという内容にも及ぶのかに関して、あいまいである。前者の場合、勝敗が問題にされ「喩え話の中で」という限定は、メタ表現の「賭け」にのみかかり、勝ちも「喩え話の中で」という限定を受けることになる。後者の場合、命題Pが喩え話であるのは、「喩え話の中で」有効という入れ子の関係になり、日常的な論理では理解しにくい。5)で今度は、4)の「喩え話の中で」勝ちという限定が否定され、「現実世界の中で (in Wirklichkeit)」の勝ちと訂正される。ここでも、その根拠は提示されない。4)と同様に、その否定がメタ表現による「賭け」にのみかかるのか、それとも命題Pが喩え話であるという内容にも及ぶのかが明確でない。前者の場合、勝敗だけが問題にされ、勝ちも「現実世界の中で」と訂正され、「喩え話の中で」は負けであると主張される。現実世界での勝ちという判定は理解しやすいが、喩え話の中での負けは理解が困難である。後者の場合、命題Pが喩え話であるという主張が有効なのは、「現実世界の中で」であることが表明されている。すなわち、2)で提示された、命題Pが喩え話であるという主張は「現実世界の中で」通用する事態であり、4)での「入れ子」による主張は誤りであることが確認される。この主張は、現実世界という事実判断を可能にする次元に関連づけられるので、日常的な理解の範囲内にある。こうして、この対話では現実世界と喩え話が対立させられていることに気づく。

上述の分析結果をまとめてみよう。最初の発言者とその相手をそれぞれAとBで表わす。数字は、上で引用したテキストに付した発話の番号に対応する。→は、暗示関係を表わす：

A 1)：助言 (命題P [喩え話にしたがえば、自身が喩えになって日々の苦勞から解放される])

B 2)：反論 ([命題Pも喩え話である]) + 確信度の高い表現 („Ich wette“)

A 3)：勝負判定 (Bが勝ちである) → ([命題Pも喩え話である] は真)

B 4)：限定 (勝ちも喩え話の中で)

→ ([命題Pも喩え話である] が真なのは、喩え話の中で)

A 5)：反駁 (勝ちも現実の中で、喩え話の中では負け)

→ ([命題Pも喩え話であるが真である] のは、現実の中で)

この分析結果を、意味論レベルと相互行為レベルごとにまとめておこう。

2.2. 意味論レベルの構造

意味論レベルでは、1)で命題Pが提示される。2)で、その命題Pが喩え話であるという内容がメタ表現を用いて主張される。3)で、このメタ表現に対応し、そ

の主張の妥当性が「勝敗」という枠組みで判定される。4)によって、その「勝敗」に基づく判定が、喩え話という世界の中での「勝ち」という限定を受ける。ここで、表層的なテーマが、命題内容の妥当性という問題から、勝敗の次元へと移行していることに注意すべきである。最終的に5)で、「勝敗」については、現実という世界の中での「勝ち」であって、喩え話という世界の中では「負け」とであると主張される。したがって、テキスト表層的なテーマが、命題Pが喩え話であるという主張の妥当性から「勝敗」へと移行し、結局、その妥当性については明確な判断は下されていない。一般に、ある主張の妥当性の判断は、現実世界を基準としてその関連でなされるはずだが、そこにそれと意味論的に対立する喩え話という可能世界が持ち込まれている。この錯綜関係によって、日常的な論理のもとでは整合的でない、つまり結束性の低い事態が提示されることになる。

2.3. 相互行為レヴェル

相互行為レヴェルで見ると、1)で命題Pが助言として提示される。2)は、それに対して反論を行なう。その際、字義どおりには「賭け」を意味するメタコミュニケーション表現が用いられ、その主張が強調される。3)は、そのメタ表現の形式に応じ、勝敗を決している。4)は、その勝敗の決定に制限を加える。この発話での„leider“という表現は、先行する発話に対する発話者の感情と密接に関連づけられる。5)では、その判定が覆され、別の限定が提示される。このように論弁的性格をもつ言語行為の連鎖によって、この対話は、相互行為に関して結束性がきわめて高いと言える。

3. Von den Gleichnissen の対話における「歪み」の技法

以上の分析から明らかなように、対話に「歪み」をもたせているのは、テキストを構成する二つのレヴェル間における結束性の高さのアンバランスにある。このような「歪み」は、少なくとももつぎの四つの技法によって実現されうる：

- 1) テキスト表層上のテーマ展開における焦点のずらし
- 2) 意味論的に相反する事項の対置による整合的集約点の欠如
- 3) 根拠不提示による反駁
- 4) 結束性のきわめて高い言語行為連鎖

*

Von den Gleichnissen に関する従来の諸研究は、そのテキストの整合的解釈という意味論レヴェルで論議しているものが多い (vgl. Allemann 1964, Arntzen 1964, Buhr 1980, Kotani 1989, 古川 1999)。本稿では、内容面と形式面の関係に焦点をあてた。その結果、意味論レヴェルと相互行為レヴェルの間の結束性に関する不統一が明らかにされた。その特徴を、カフカ的な「歪み」と見なし、テキスト

構成上の技法（ストラテジー）と捉えることができる。本稿で指摘できたのは、その「歪み」を構成しうる技法の一部に過ぎない。今後の課題は、カフカの他の作品を分析することによりさまざまな技法を検出してゆくことである。

注釈

- * 本稿は、注釈をできるだけ本文内に取り込むスタイルを採用している。
- 1) Philippi (1966) には、*Das Schloß* における対話の特殊な機能に関して指摘がある (S.21)。この点について、野口広明氏 (九州産業大学) よりご教示を受けた。記して感謝する。

文献

- 使用テキスト

Franz Kafka: *Sämtliche Erzählungen*. Hrsg. von P. Raabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 1970.

- Allemann, B.: „Kafka: VON DEN GLEICHNISSEN“. In: *ZfdP* Nr. 83, 1964, S. 97-106.
- Arntzen, H.: „Kafka: VON DEN GLEICHNISSEN“ In: *ZfdP* Nr. 83, 1964, S. 106-112.
- Buhr, G.: „Franz Kafka, Von den Gleichnissen. Versuch einer Deutung“. In: *Euphorion* 74. Band, 1980, S. 169-185.
- Ehlich, K.: „Kooperation und sprachliches Handeln“. In: F. Liedtke / R. Keller (Hgg.): *Kommunikation und Kooperation*. Tübingen: Niemeyer, 1987, S. 19-32.
- 古川 昌文: 「反転する現実 - カフカにおける喩えの機能をめぐる一試論 -」. In: 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第32号, 1999, S. 11-20.
- Grice, H.P.: „Logic and Conversation“ In: P. Cole / J.L. Morgan (eds.): *Speech Acts. Syntax and Semantics*. Vol.3, New York: Academic Press, 1975, S. 41-58.
- Hess-Lüttich, E.W.B.: „Kafkaeske Konversation. Ein Versuch, K.s Mißverstehen zu verstehen“. In: W. Vandeweghe / M.v.d. Velde (Hgg.): *Bedeutung, Sprechakte und Texte*. Akten des 13. Linguistischen Kolloquiums, Gent 1978, Band 2, Tübingen: Niemeyer, 1979, S. 362-370.
- Kotani, T.: „Zur Erzählstruktur in Kafkas «Von den Gleichnissen»“. In: 城西大学経済学会『城西人文研究』第17号, 1989, S. 55-64.
- 丸井一郎: 「談話の相互行為的基盤と『協調』の概念」. In: 日本独文学会『ドイツ文学』第88号, 1992, S. 89-100.

- Marui, I.: „Argumentieren, Gesprächsorganisation und Interaktionsprinzipien –Japanisch und Deutsch im Kontrast–“. In: *Deutsche Sprache* Heft 4, 1995, S. 352-373.
- 西嶋 義憲: 「カフカのテキスト *Die Bäume* を理解するために –テキストの多層性について–」. In: 『かいろす』(「かいろす」同人) 第28号, 1990, S. 31-44 (Dt. Übers.: „Zum Verstehen von Franz Kafkas Stück *Die Bäume* –Ein textlinguistischer Ansatz zur Vielschichtigkeit des Stücks–“ In: 『金沢大学文学部論集』第20号, 2000, S. 175-195).
- Philippi, K.-P.: *Reflexion und Wirklichkeit. Untersuchungen zu Kafkas Roman „Das Schloß“*. Tübingen: Niemeyer, 1966.
- Politzer, H.(Hg.): *Das Kafka-Buch. Eine innere Biographie in Selbstzeugnissen*. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 1983 (1977).
- Reinelt, R.: „Interaktionsorganisation: Sprecherwechsel im Deutschen –In Kontrastierung mit dem Japanischen–“. In: 日本独文学会『ドイツ文学』第88号, 1992, S. 101-110.

„Verzernte“ Dialoge in den Werken Kafkas

—Eine textlinguistische Analyse von Kafkas Stück *Von den Gleichnissen*—

Yoshinori NISHIJIMA

Einleitung:

Bei dem Kafkaesken in den Dialogen in Kafkas Werken handelt es sich oft um Mißverständnisse zwischen den Teilnehmern an den Dialogen oder um Mängel an semantischer Kohärenz in der Themenentwicklung (vgl. Hess-Lüttich 1979). Andererseits zeichnen sie sich durch eine besonders enge interaktionale Verkettung der Sprachhandlungen aus. Diese Probleme merkt man bei der ersten Lektüre nicht, weil die Dialoge meistens an der Oberfläche unproblematisch ablaufen, d.h. sie erfüllen die Bedingungen der formalen Kooperation (Ehlich 1987).

These:

Meine These lautet, daß die strukturelle Auffälligkeit der Dialoge in Kafkas Werken mit einer Differenz im Kohärenzgrad zwischen den zwei textkonstituierenden Ebenen, nämlich der semantischen und der Interaktionsebene, erklärt werden kann. Dialoge mit dieser Eigenschaft nenne ich hier „verzernte“ Dialoge und untersuche diese am Beispiel von Kafkas Prosastück *Von den Gleichnissen*.

Ergebnisse:

Die folgenden Techniken konnten aufgezeigt werden:

- 1) Fokusverschiebung in der Themenentwicklung;
- 2) Mängel durch ein uneinheitliches Bild durch Darstellung von semantisch konträren oder kontradiktorischen Sachverhalten;
- 3) Einschränkung und Negierung ohne Begründung;
- 4) hochkohärente Ketten von Sprachhandlungen.

Bei 1)–3) handelt es sich um die semantische, bei 4) um die Interaktionsebene, und zwischen beiden ist eine Differenz im Kohärenzgrad festzustellen.